

はあとふる ふくしま



2012

7

Vol.195

発行・企画編集

社会福祉法人 福島県社会福祉協議会

TEL (024) 523-1251(代) FAX (024) 523-4477

URL <http://www.fukushimakenshakyo.or.jp>

メール heartful@fukushimakenshakyo.or.jp



ふくしまと全国をつなぐ
缶バッジ！



今月の 表紙

東日本大震災後に、南相馬市と楡葉町の6つの障がい者作業所によって立ち上げられた「南相馬ファクトリー」では、仕事おこしの一環で全国から缶バッジの製作を請け負い販売しています。利用者の皆さんは今日もたくさんの温かい応援を胸に、一つひとつ丁寧に缶バッジの製作に励んでいます。(詳しくは6～7Pで紹介)

【特 集】 2

東日本大震災の被災者に対する心のケアのあり方

～ふくしま県民の心を支える長期的な取り組み～

【ふくしま明日への一歩】 6

日々の仕事と人とのつながりを糧に、福島で生きていく
～南相馬ファクトリーの缶バッジ製作・販売～

情報掲示板 8

- ・「平成24年度 第1回 福祉の職場 合同面接会」のご案内
- ・うつくしま、ふくしま。健康福祉祭
- 第22回福島県シルバー美術展のお知らせ



「はあとふる・ふくしま」の作成経費の一部として、共同募金配分金および特別賛助会員の寄付金を使用させていただいております。

東日本大震災の被災者に対する心のケアのあり方

～ふくしま県民の心を支える長期的な取り組み～

東日本大震災と原発事故による避難生活が長期化し、多くの被災者がストレスを抱えています。被災者の支援を続けてきた人にも疲労の色が見えるようになりました。先の見通しがつかない状況に閉塞感が広がっています。

そのようななか、今年2月に福島県では「ふくしま心のケアセンター」を設置、総合的な心のケア対策を始めました。

環境の変化に合わせた支援を

日本において災害後に「心のケアセンター」が立ち上げられるようになった契機は、平成7年の阪神淡路大震災でした。^{*}PTSD（心的外傷後ストレス障害）に注目が集まり、長期間にわたる丁寧なケアの継続が求められていたことを受け、「兵庫県心のケアセンター」が設けられたのが始まりです。その実績を受け、平成16年の新潟中越地震でも同様に設けられています。

東日本大震災では、昨年度の第3次補正予算で厚生労働省の予算が計上され、岩手・宮城・福島の三県それぞれ

が実施主体となって「心のケアセンター」を運営することになりました。

今年2月、福島県精神保健福祉センター内に設けられた「基幹センター」を皮切りに、4月には県北・県中・県南・会津・相馬いわきに各万部センターが、南相馬・埼玉県加須に駐在が設けられ、地域に密着した活動を展開しています。

原発事故による避難が続く町村では、仮の町を設ける構想などもあり、避難住民は、今後さらなる生活環境の変化が予想されます。センターのスタッフは、その都度必要とされる支援を模索しながら、震災で大きな影響を受けた「心」に寄り添い、さまざまな変化に合わせた支援を展開する予定です。

ふくしま心のケアセンター活動内容

基幹センター ☎(024)535-8639

県北方部センター ☎(024)533-4161

① 仮設訪問（杉田農村・杉田住民センター・飯館古倉公務員宿舎・安達運動場・杉内・さくら等）

② 病院訪問

③ 家庭訪問

④ 集団活動

⑤ 浪江町保健師ケア・支援者支援研修



県中方部センター ☎(024)983-0274

① 双葉町ひとやすみの会 ② 親子ふれあい教室

③ 葛尾村健康サロン ④ 個別支援

⑤ 葛尾村精神障がい者デイケア

⑥ 富岡町健康相談（絆カフェ）

県南方部センター ☎(0248)27-3625

① 中田仮設個別支援・かたろう会

② 郭内仮設健康サロン・個別支援

③ 一本木仮設一本木ルーム・いきいきサロン・個別支援

④ 西郷仮設親子遊び・個別支援

会津方部センター ☎080-2814-1923

① 榎葉サロン ② 個別訪問 ③ 大熊町支援者ミーティング
④ 相双サロン ⑤ 会津保福活動報告 ⑥ 榎葉ケア会議

相馬方部センター ☎(0244)26-9753

① 仮設住宅への訪問活動
② 相馬市のサロン活動（いつもここで一休みの会）
③ 新地町でのサロン活動（ちょっとここで一息の会）
④ 相馬市保健センターでの集団活動（一休みの会）

いわき方部センター ☎080-1662-3275

① 訪問活動 ② 町村駐在ミーティング
③ 大熊町仮設・サロン対応 ④ 双葉町サロン

南相馬市駐在

① 継続ケース訪問 ② 精神科医師同行訪問
③ 10カ月児健康相談 ④ 自由参加型サロン活動

加須市駐在

① 住民の健康相談 ② 町職員健康調査
③ 借り上げ住宅健康調査

※心的外傷後ストレス障害

PTSDとは

ふくしま心のケアセンター次長の高橋悦男さんによると、「災害直後に眠れなかったり、不安を感じることは誰にでもある普通の反応です」。



ふくしま心のケアセンター
次長 高橋悦男さん

不眠や不安感の症

状は、ほとんどの場合、時間の経過とともに回復していきますが、以下のような症状が1カ月以上続く場合は、PTSDが疑われます。

発症から時間が経過すると治療効果があがりにくくなるため、なるべく早めに医療機関にかかることが重要です。

1 再体験

災害の経験に関する不快で苦痛な記憶が、繰り返しよみがえります。動悸や息切れなどの身体反応もあります。

2 回避・麻痺

災害の体験に関することを極力さげようとします。そのほか、趣味や日常の活動に以前ほど興味や関心がわなくなったり感情を感じにくくなるなどの心の変化があります。

3 過覚醒

眠れない、イライラする、集中できないなど精神的な緊張が高まった状態です。

仮設住宅などでの
ケア

今回の震災では、地震や津波の一時で強いストレスに加えて、長期にわたる避難での生活の変化や仕事を失ったことに対するストレスとどう向き



ふくしま心のケアセンター
次長 大川貴子さん

避難住民だけではなく
ずっと支援に関わってきた人にも目を向けて

合っていくかが課題になっています。

例えば、福島県内では、畑仕事が生きがいになっている高齢者がたくさんいましたが、仮設住宅などでは、長時間家でテレビを見て過ごすしかない状況にあります。いままでも農作業を楽しむことで維持できてきた身体的精神的な機能が低下していくという現状があります。

住民支援に関しては、今までの経験からしても支援を必要とする方を待っている、来てくださる方はそう多くありません。そこでセンターでは、仮設住宅などに出向いて市町村の保健師や社協の生活支援相談員と連携し

ながら支援を進めています。

また、放射性物質に対する不安で子どもたちは外遊びを制限されてきたので、相当な我慢を強いられている様子がうかがえます。外で遊ぶこと、十分に身体を動かすことは子どもたちの成長発達に非常に大切なことなので、その点についての対策にもつないでいかなければならないと思っています。

支援者は自分の疲れに
気づきにくい

さらにとても重要なのが、震災後ずっと被災者支援に関わってきた人のケアです。自分自身の疲れにはなかなか気づくことができません。まずは、自分が疲れていることを自覚していたき、きちんと休むことの大切さを理

解してもらいたいと思っています。

ただ、組織として休める体制がなければ休むことができません。そういう意味からも、上司にあたる人が率先して休みをとるように機会があることにお話しています。また、一人ひとりが心のケアの専門家に相談できる機会を組織として設けて、自分から「調子が悪い」と言い出せる仕組みをつくる必要があります。

ケアする側としてがんばってきた人たち同士で想いを分かち合うグループセッションも効果的です。支援者支援では、組織に対するアプローチも大切になります。心のケアセンターとしても、支援者のメンタルヘルスが保てるような働きかけを行っていきたいと思います。

仮設住宅の集会所で心のケア

県北保健福祉事務所が毎月行っている仮設住宅での健康相談には、心のケアセンターの県北方部センターからもスタッフが同行をしています。6月11日、浪江町からの避難者が住む二本松市杉田の仮設住宅では、7人ほどの高齢者が集会所に集まっていました。



なごやかな雰囲気の中心のうちを話す参加者のみなさん。この後は、軽い体操でリフレッシュしていました。

コミュニケーションは 血圧測定から

健康相談は、午前10時にスタート。保健福祉事務所からは、保健師、歯科衛生士・リハビリなどの専門医療技術が出向きます。開催日は掲示板や回覧などで告知していますが、参加する人は□□が多いようです。

まず、最初に保健師が血圧を計測。身長や体重なども測りながら、最近の食生活や運動について話を聞いていきます。「仮設からバスが出ているけれども、病院も買い物も遠くなつてしまい大変」。そんな近況を話す人もいます。



「今までいっしょに暮らしてきた孫たちと離ればなれになったのが残念」と仮設住宅に住む横山さんご夫妻。



心のケアセンターの佐藤初実さん（中央）と渡邊由希子さん（左）。必要があれば、家を訪問して個別対応しています。

健康チェックの後、輪になってお茶を飲みながら、心のケアセンターの精神保健福祉士・佐藤初実さんが中心となつて心の講話を始めました。この日のテーマは「自殺予防」。自殺を考えている人のサインに気付く、声をかけたり見守っていく内閣府自殺対策推進室の取り組み「ゲートキーパー」のリーフレットを配りながら、住民の現在の想いなどについて聞いていました。折しも月末に福島市の借り上げ住宅から一時帰宅した浪江町の男性が自殺した事例があつたばかり。

「辛い気持ちは分かるけれども、気持ちを切り替えていくしかない」と話していたのは、夫婦で参加していた横山幸太さん（82歳）。「外に出る元気がない人もいるけれども、なるべく声をかけて楽しみをみつけることが大事」と言います。

心のケアセンターのスタッフは、あくまでも「がんばらずに、いっしょに考えましょう」というスタンス。佐藤さん

は「講話のなかで、ささいなことでも、何か役に立つことを見つけてもらえれば」と話します。

「見捨てられた感」の 払拭に

「顔を覚えてもらい、困ったときに相談してもらえる存在になったら」と話すのは、臨床心理士の渡邊由希子さん。「心によりそう存在がいるだけでも、見捨てられたような気持ちが払拭できるかもしれない」。

県北方部センターの個別対応は、基本的に避難町村の保健師から寄せられた情報等をもとに行っています。現在個別対応で多いのは、統合失調症などの精神障がい者が避難によって通院が滞ったり、服薬管理が上手くいかなくなつてしまつたケースです。作業所などの社会資源を利用して問題なく暮らすことができていた人が、避難によって孤立することもあります。「心のケアにできることは限りがあると実感しています。避難生活の長期化が予想されますので、生活支援相談員との連携もさらに必要になってくると思います」と佐藤さん。

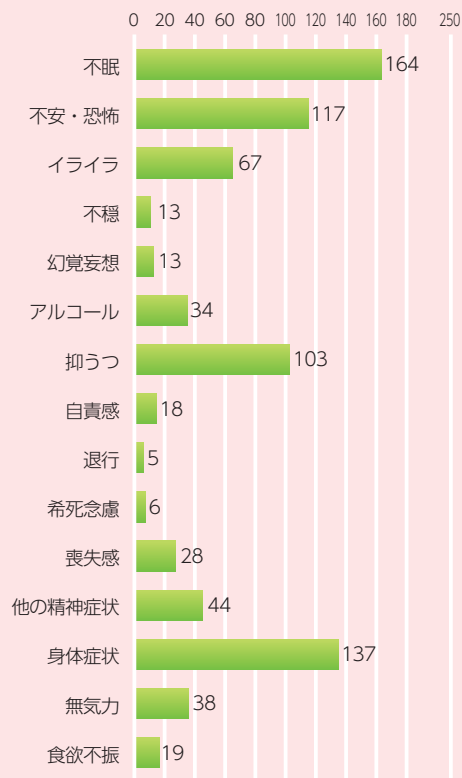
主役はあくまでも地元住民。その力を引き出すべく、スタッフ一人ひとりが模索しているところです。

■ふくしま心のケアセンター

総相談件数における主訴内訳

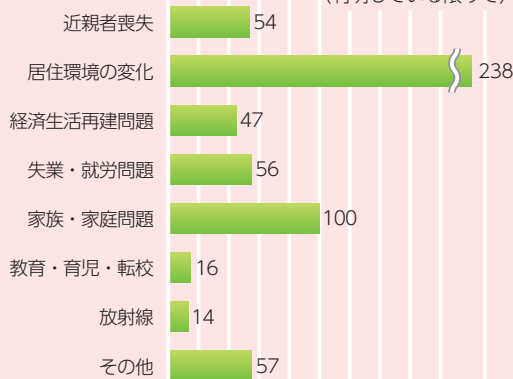
個別の対面相談のみ(集団ケア・電話相談を除く)

平成24年5月1日～6月2日(複数回答)



■相談の背景にある主な原因内訳

(判明している限りで)



顔が見える関係を大切に、心のケアの裾野を広げる

ふくしま心のケアセンター
専門員(精神保健福祉士)まつだ しょういち ろう
松田聡一郎さん

ハイリスクをみきわめて

ふくしま心のケアセンターには、保健師や臨床心理士、作業療法士、精神保健福祉士など、54人の職員がいます。多くの専門職スタッフが、他県から「被災地の役に立ちたい」と福島県を選んできています。不眠が続いたり、抑うつ的になっている方、食事が十分とれていない方など、ハイリスクな方をみきわめ

て、医療につなげていくことが重要で、その見極めも専門職の役割の一つです。訪問活動では、まずは個人対個人、地域対心のケアセンターの「信頼関係」を築かなければなりません。あらゆる職種から聞こえてくるのは、現場では、「何でもやらなくてはならないんだ」という声です。仮設住宅のサロンに入って、レクリエーションをしたり、気軽にお茶のみ話をするこの大切さが、共通認識されてきたところです。

連携も大切です。例えばいわき方部では、保健福祉事務所等と協働で訪問活動をしています。精神保健福祉士が、お年寄りから「入れ歯があわなくて…」と相談されたときに、歯科衛生士から「食事でもできないし、相当なストレスのはず」と教えてもらって、はっ

と気づくような場面がありました。

ノウハウを共有

私たちには、アルコール依存や、グリーフ(悲嘆)ケアなどのノウハウがあります。常に地域で多くの人を見守っておられる生活支援相談員の方を対象とした研修や、仮設住宅での勉強会を行うことで後方から支援することもできるはずです。

さらに過去の災害の経過を見ると、支援する側の心理的な影響は3年後に出ると言われています。避難住民だけでなく被災者支援にかかわる人たちとの「顔が見える関係」をつくりながら、心のケアの裾野を広げていきたいと考えています。

力を引き出す支援にむけて

昨年、県内に配置された「生活支援相談員」の活動のなかでも、「アルコール依存」や「不眠」などにまつわる問題が浮き彫りになってきています。生活支援相談員はそれらの解決のために、専門機関につなぐだけではなく、地域全体で理解するための勉強会を実施しようという機運が高まっています。

例えば、アルコール依存の問題は、当事者よりも家族など関係者が困り果てて相談をもちかけるケースが少なくありません。飲酒をやめようとする人を周囲が上手くサポートできれば、問題の解決につながることもできます。また、不眠などの不安定な精神状態を誰かに相談できる仕組みがあれば、早めに何らかの手を打つことができ、自殺予防にもつながることであります。

過去に前例のない長期的な避難生活が予想されるなかで、住民一人ひとりの直接的な心のケアと、住民同士のサポート力を最大限に引き出す「ふくしま心のケアセンター」の役割には大きな期待が寄せられます。

明日への一歩

南相馬市

取材協力

南相馬ファクトリー
〒975-0026 南相馬市
原町区上高平字中里430-2
(自立研修所えんどう豆 内)
TEL・FAX 0244-23-4177
[http://www.
tsunagarimugen.com/](http://www.tsunagarimugen.com/)



南相馬ファクトリーに参加している、自立研修所えんどう豆の皆さん。製造した缶バッジは1個150円（特注サイズは1個300円）で販売。利用者がイラストを描いたオリジナル缶バッジが人気です。

日々の仕事と人とのつながりを糧に、福島で生きていく ～ 南相馬ファクトリーの缶バッジ製作・販売 ～



南相馬ファクトリー代表兼自立研修所えんどう豆所長の佐藤定広さん。「缶バッジ一つひとつに私たちの思いが詰まっていますよ」。

思いをひとつに作業所を再開 仕事おこしのシンボル、缶バッジ

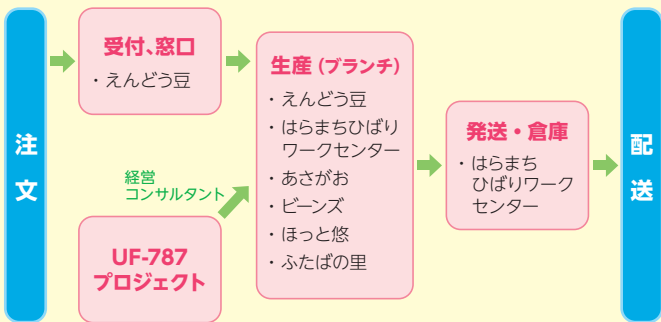
南相馬市は今年4月に避難区域が見直されました。それに伴い、市内に少しずつ市民が戻りつつあります。しかし一時は市外へ避難した市民は7万人のうち6万人前後にのぼり、市内に残ったのは障がい者や高齢者と、その家族だったと言われています。障がい者の場合、避難所になじみず、家に戻って来た方も多く、作業所の利用者からは早く再開してほしい、みんなと仕事したいという要望が早々に上がりました。各作業所はその思いを受け、障がい者の生活や仕事の支援を行うJDF（日本障害フォーラム）の被災地障がい者支援センターふくしま

東日本大震災に伴う福島第一原発事故以来、浜通りの障がい者作業所では仕事量が減少し、利用者の賃金は一時、半分以上にまで下がってしまいました。この状況を、共同で仕事おこしに取り組み乗り越えようと、南相馬市と檜葉町の6つの作業所により結成されたのが南相馬ファクトリーです。缶バッジの製造・販売を通して福島市の元気を発信しています。

（郡山市）とボランティアの協力を得て、昨年6月頃から徐々に再開し始めました。そのひとつ、自立研修所えんどう豆の所長・佐藤定広さんは、当時を次のように振り返ります。「震災前のように日々作業所に通うことで生活のリズムを整え、利用者の居場所を取り戻すことを第一に考えました。しかし、以前のえんどう豆ですと、さをり織りのバッグの製作・販売、ラーメン宅配、委託清掃などを行っていたのですが、震災後は仕事の量が大幅に減ってしまっ。それはどこの作業所も同じで、利用者への賃金を支払うことができない作業所もありました」。

そんな厳しい現実を打開したのは、被災地障がい者支援センターふくしまのコンサルタントによる仕事おこし「U-F-787（ふくしま菜の花）プロジェクト」でした。「それぞれの作業所の力だけでは仕事を得ることは困難です。えんどう豆をはじめとする南相馬市の、はらまちひばりワークセンター、あさがお、ビーンズ、ほっと悠と、檜葉町からいわき市に避難中のふたばの里が、南相馬ファクトリーの

“つながり∞ふくしま”缶バッジの受注から納品までの流れ



福島県動物救護本部の缶バッジの売上は、避難区域から保護されたペットの飼育費などにあてられます。「動物を救う力になれることが嬉しいです」と佐藤さん。



全国から届いた仕事の依頼
働くことの嬉しさを実感

名のもとチームを組みました。共同で缶バッジ製作の仕事を受注・販売することで元の賃金まで戻そう、そして活動を通じて人と人がつながり、福島の再生に結びつけよう。そんな思いで私たちは、つながり∞ふくしまをテーマに新しい一歩を踏み出しました」と佐藤さん。こうして、総勢160人が参加する南相馬ファクトリーのプロジェクトが、昨年8月から本格的に始まりました。

南相馬ファクトリーの缶バッジ製作は、えんどう豆がホームページや電話で依頼を受け、それを各作業所に割り振る仕組みで行っています。缶バッジのデザインは、「つながりねこ」や「つながりめひかり」などの基本型があるほか、お客様の要望に合わせたデザインにしたり、イラストを得意とする利用者がオリジナルで描き起こすことも。製作作業は、まずイラストや写真が印刷された型を切り、それを缶バッジ製作機でプレスし、ピンをつけます。そして完成品を袋詰めする際には、ひまわりの種を同封します。ひまわりが咲いたら種を採って送り返してもらい、それをまた植えたり、精油事業に活用して仕事おこしにつなげようという仕掛けなのです。

「南相馬市を訪れたボランティアの

方々が、南相馬ファクトリーを応援したいと缶バッジを購入してくれ、その方々の口コミもあって、全国の市町村、企業、福祉施設や著名人など、多方面から注文をいただくようになりました。イベントで缶バッジを販売し、私たちの思いを全国に広げてくれた大学生もいました。これこそ、つながり∞ふくしまであり、人って本当に温かいなと実感しました」と佐藤さん。おかげで、今年6月までの缶バッジの出荷総個数は15万個を超え、利用者の賃金も震災前の水準に近いところまで回復してきているそうです。

全国とつながった喜び
これからもつながり∞ふくしま

えんどう豆の職員、高野由紀子さんは、震災後に南相馬市外へ避難しましたが、やはり地元に戻りたいという思いから昨年9月に戻ってきました。「つらい状況でも南相馬ファクトリーとして団結し、缶バッジを作り上げている利用者の姿に感動しました。広島県の方からの『原発の苦しみは分かります。頑張ってください』という励ましや、缶バッジについていたひまわりが、きれいに咲きました」など全国から声が届き、とても嬉しかったと高野さん。しかし、以前のような生活を送ることができるようになった利用者がいる一方、未だに避難を余儀なくされている利用者もいることに心苦しさも感



えんどう豆の職員、高野由紀子さん。「利用者の皆さんが働くこの作業所は、私にとっても心が落ち着く場所です」。

じています。「震災前と全て同じようにはいきませんが、作業所に通うことが、利用者の方にとっては大切だと思っています。いつか再び一緒に仕事ができる日を楽しみにしています」。

南相馬ファクトリーのスタートから約一年が経過した今、今後の展望について佐藤さんは、「今年度は缶バッジの製作・販売を続けていく予定で、この活動をきっかけに各作業所の他の仕事にも活気が戻ることを期待しています。原発に関してはまだ心配ですが、今住んでいるこの場所で、幸せに過ごしていくことが何より大事です。私たち職員は、障がい者の方が仕事や余暇を通して穏やかな生活を送ることができるよう支援し続け、缶バッジでできた全国の人とのつながりを勇気に、みんなと一緒に福島で生きていきたいと思っています」と話してくれました。

南相馬市から全国に広がった障がい者作業所支援のシンボル、つながり∞ふくしま、缶バッジ。障がい者の方はもちろん、福島県が明日へ前進するための希望となって、多くの人々の胸で輝いています。

知って
おきたい

福祉ワード

今回は

SELP (セルフ)

本誌 6～7 ページで紹介している南相馬ファクトリーのように、障がい者の自立を目指して生産活動や創作活動を行っている施設・事業所を「社会就労センター／SELP (セルフ)」と呼びます。今回のワードはこの「SELP」について紹介します。

障がい者が自立を目指して働く場のことです

SELP (セルフ) とは英語のSelf Help (自助自立) から作られた造語です。

働く意欲がありながら、障がいなどの理由により一般企業に就職することが難しい人々のための就労の場を「授産施設」といいますが、1995年6月に全国社会就労センター協議会が**授産施設に変わる新しい名称として作った名称が「社会就労センター／SELP (セルフ)」です**。それぞれの頭文字は、Support (支援)、Employment (就労)、Living (生活)、Participation (社会参加) も意味しています。

この言葉には、ハンディキャップに負けずに社会自立を果たそうとする人たちの決意がこめられています。障がいのある人々が生活や仕事をするうえで、十分な社会環境が整っているとはいえませんが、そのような中でも、自分なりの働き方で社会に貢献しながら、自分たちの生活を作り出す「自立」を目指しているのです。

あなたの身近にも SELP

障害者自立支援法の施行により「授産施設」の多くは、「就労継続支援事業所 (A型・B型)」「就労移行支援事業所」へ移行しました。全国では約8,000カ所、県内では150

カ所を越えるセルフ事業所が、それぞれ特色ある事業に取り組んでいます。

印刷や縫製等を大規模に行っているところもあれば、企業の下請けとして加工や細かい手作業を得意としているところもありますが、近年注目されているのが、自主製品 (セルフ製品) です。布製品や織物、木工品などの職人的な製品や、パンや焼き菓子、ジャム、漬物といった加工食品など、バラエティに富んだセルフ製品が作られています。

本誌のクロスワードパズルの景品もセルフ製品を利用していますが、セルフ製品は厳選された材料を使っていることが多いため、毎回当選者の皆様に大好評です。

県内各地でセルフ製品を販売するお店やイベントも増えています。また、ネット販売も行われていますので、ぜひ一度、セルフ製品に触れてみてください。あなたのお買物が、障がい者の自立を支える一歩となります。

【関係団体ホームページ】

福島県授産事業振興会 HP

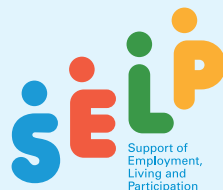
<http://f-jusan.jp/>

全国社会就労センター協議会

<http://www.selp.or.jp/>

日本セルフセンター

<http://www.selpjapan.net/>



ふくしま インフォメーション

財団法人福島県総合社会福祉基金 平成24年度生活復興助成事業のご案内

財団法人福島県総合社会福祉基金では、このたび東日本大震災等の被災地の復興を促すため、被災者を支援する団体への助成を行います。

対象事業

本県の被災者を支援するため、主として仮設住宅・借上住宅等において、継続的に実施する以下の事業

- 被災者の日常生活を支援する等、さまざまなサービスを提供する事業
- 福祉情報の提供やネットワークづくり、文化活動を通じて、被災者の生活再建や福祉活動の向上を図る事業

助成限度額 150万円以内

助成率 助成対象と認める経費の10/10

対象者 ・社会福祉法人 ・公益法人(特例民法法人を含む)
・宗教法人、その他公益事業を行う特殊法人
・社会福祉協議会 ・特定非営利活動法人
・福祉活動を行っているボランティア団体
・その他、審査委員会が適当と認めた団体

受付期間 平成24年8月1日(水)まで

決定日(予定) 平成24年8月29日(水)

申し込み、お問い合わせ

財団法人福島県総合社会福祉基金 福島市杉妻町2-16 県保健福祉部社会福祉課内
TEL (024) 521-7322 FAX (024) 521-7917

福祉情報を 掲載 いたします

福祉に関する案内や催しなどの情報を、本コーナーで紹介させていただきます。掲載料はかかりませんので、ぜひご利用ください。

お問い合わせ先

県社協 総務企画課
TEL (024) 523-1251

情報掲示板

「平成24年度 第1回 福祉の職場 合同面接会」のご案内

福島県内の社会福祉施設等に就職を希望する求職者、
並びに平成25年3月並びに平成26年3月学校卒業予定の学生を対象に開催します。

入場
無料

日時・会場

時間帯は各会場共通：午後12時30分～午後4時

(1) 会津若松会場

7月28日(土) 会津若松ワシントンホテル
会津若松市白虎町201 TEL(0242)22-6130

(2) いわき会場

7月29日(日) いわきワシントンホテル
いわき市平字一丁目1 TEL(0246)35-3375

(3) 福島会場

8月 4日(土) ホテル福島グリーンパレス
福島市太田町13-53 TEL(024)533-1171

(4) 郡山会場

8月11日(土) ビッグパレットふくしま
郡山市南二丁目52 TEL(024)947-8010

時間	内容
午後12時30分 ～午後1時10分	【Ⅰ 就職体験談】 「聞いてみよう 就職のポイント」 ～私はこうして就職しました～ 講師：福祉の現場で働く職員
午後1時10分 ～午後1時50分	【Ⅱ 施設・事業所PR(説明)】 「福祉の職場 仕事内容を説明します」 ～合同面接会に役立てる～ 講師：高齢者福祉施設、障がい者福祉施設、 児童福祉施設で働く職員
午後2時 ～午後4時	【Ⅲ 合同面接会】 「施設面談コーナー」、「ハローワークコーナー」、 「介護職就労等相談コーナー」、「福祉人材セン ター相談コーナー」、「福祉情報提供コーナー」

お問い合わせ先

県社協 人材研修課

TEL (024)521-5662 FAX (024)521-5663

メール jinzai@fukushimakenshakyō.or.jp

※平日の午前9時
～午後5時まで
にお問い合わせ
ください。

うつくしま、ふくしま。健康福祉祭 第22回福島県シルバー美術展のお知らせ

高齢者の創作した洋画、日本画、書、写真、彫刻・工芸の各部門の作品を展示し、高齢者の文化活動を支援し、ふれあいと生きがいづくりを支援するため、福島県シルバー美術展を開催します。昨年は震災等で中止となり、2年振りの開催です。高齢者の皆様の日頃の創作活動の発表の場としてぜひ出品いただくとともに、多くの県民の方々のご来場をお待ちしています。

◆開催期間 平成24年9月6日(木)～10日(月)

◆作品の出品

出品資格：60歳以上（昭和28年4月1日以前に生まれた人）で県内に居住するアマチュアの方

出品部門：洋画、日本画、書、写真、彫刻・工芸の5部門

◆会場 福島市アクティブシニアセンター^{アオウゼ}(AOZ)
(福島市曾根田町1-18 MAXふくしま4階)

◆出品数等

出品点数は、各部門について1人1点とする。
出品作品は、3年以内に出品者が創作したものであること
(公募展等で受賞したものを除く)。

◆表彰等

優れた作品には、知事賞を含むシルバー賞、優秀賞、依嘱特別賞を贈り表彰します。また、最高齢の出品者に賞を授与します。入賞作品及び依嘱作品の中から審査員の推薦により、平成25年に高知県で開催の第26回全国健康福祉祭高知大会 美術展に出品します。

◆作品の搬入・搬出

搬入：平成24年9月3日(月)午前10時30分～午後2時30分

搬出：平成24年9月10日(月)午後3時～午後4時

※搬入及び搬出は出品者の責任で行っていただきます。

◆作品の出品に当たって

作品を出品される方は、事前に「第22回福島県シルバー美術展実施要項」を必ず入手していただく必要があります。この実施要項で次の(1)の作品規格などの取扱いを確認していただき、実施要項に添付されている(2)の「出品申込書」(コピー使用は不可)に必要な事項を記入してください。

(1) 各部門ごとに作品の大きさ、額装などに関する作品規格が定められています。

(2) 出品される方は、搬入日に出品申込書を添えて作品を搬入していただきます。

◆実施要項及び出品申込書の配備箇所

各市町村の市役所又は役場(高齢福祉担当課又は生涯学習担当課)、各公民館(学習センター含む)、老人福祉センター(地域交流センター含む)、老人憩いの家、市町村立文化施設、県・市立美術館、市町村社会福祉協議会、市町村老人クラブ連合会、県地方振興局、県保健福祉事務所、市保健所(郡山・いわき)、主な画材店・カルチャー教室など



お問い合わせ先

県社協 いきいき長寿課(シルバー美術展担当)

TEL (024)524-2224 FAX (024)524-2228

赤い羽根 ささえあい



社会福祉法人福島県共同募金会

〒960-8141 福島市渡利字七社宮111 (福島県総合社会福祉センター内)

TEL (024) 522-0822 FAX (024) 528-1234

●メールアドレス akaihane@axel.ocn.ne.jp

●ホームページ <http://www8.ocn.ne.jp/~akaihane/>

赤い羽根共同募金ふくしま

検索

平成23年度収入支出決算報告

福島県共同募金会の平成23年度収入支出決算をご報告いたします。

皆様からお寄せいただいた寄付金は、平成24年度に社会福祉施設の備品整備や建物の補修・修繕をはじめ、社会福祉団体やボランティアグループ、社会福祉協議会等が行う地域の福祉活動など様々な事業に使われます。その間は「未交付配分金」として県共同募金会でお預かりしています。

なお、詳しい寄付金の使いみちについては県共同募金会ホームページで公開しております。

平成23年度共同募金以外の寄附金について公表します

福島県共同募金会では、年間を通して指定寄附金の相談・受付を行っております。

指定寄附金とは、寄附者が寄附先と使いみちを指定して行う寄附のことです。共同募金会を経由することによって、税制上の優遇措置（株式会社など法人の場合は全額損金算入）を受けることができます。

法人及び個人からの受配者指定寄附金による、平成23年度の配分額の合計が3,000万円を超える受配者は次のとおりです。

(単位：円)

寄附者名	受配法人名	配分額
医療法人社団 平成会	社会福祉法人 湖星会	32,400,000
竹川 鉦一 財団法人 脳神経疾患研究所 ゼビオ 株式会社 株式会社 エディソン 株式会社 エフコム 有限会社 エフアイ企画 株式会社 幸楽苑	社会福祉法人 南東北福祉事業団	53,370,000

貸借対照表

平成24年3月31日現在 (単位：円)

資産の部		負債の部	
勘定科目	当年度末	勘定科目	当年度末
資産の部		負債の部	
【流動資産】	605,881,936	【流動負債】	373,231,905
預貯金	605,881,936	未交付配分金	355,811,133
		預り金	4,420,772
【固定資産】	108,505,570	災害等準備金	13,000,000
基本財産	3,000,000	23年度災害等準備金	13,000,000
基本財産特定預金	3,000,000	【固定負債】	13,715,126
その他の固定資産	105,505,570	退職給与引当金	10,883,730
器具及び備品	179,095	県共済会退職引当金	2,831,396
ソフトウェア	415,625	負債の部合計	386,947,031
基金積立預金	91,195,724	純資産の部	
県共済会退職引当預金	2,831,396	【基本金】	5,220,247
全国退職共済預金	10,883,730	基本金	5,220,247
		3号基本金	5,220,247
		【その他の積立金】	91,195,724
		基金積立金	91,195,724
		【次期繰越活動収支差額】	231,024,504
		次期繰越活動収支差額	231,024,504
		(うち当期活動収支差額)	174,681,079
		純資産の部合計	327,440,475
資産の部合計	714,387,506	負債及び純資産の部合計	714,387,506

福祉図書紹介

『新 社会福祉法人会計基準のすべて』



著者 中村厚
(公認会計士・税理士)

厚生労働省は平成23年7月、「社会福祉法人会計基準」を公表。平成24年度から原則適用、平成27年度までにはすべての社会福祉法人に強制適用されます。

本書は、一変する社会福祉法人の会計環境に備えるため、新基準作成に携わった委員自らが、新会計基準のポイントと移行に当たつての具体的手続きを豊富な事例と図解を用いて解説しています。

激変する社会福祉法人会計環境の中で、関係者必読の一冊です。

発行所 株式会社きぎょうせい
B5判・384頁
価格 定価3,800円(税込)のころ
特価3,500円(税込)

※送料サービス

購入方法

県社協総務企画課まで
ご連絡ください。

TEL (024) 523-1251
FAX (024) 523-4477

社協通信

昨年7月の豪雨水害では、ボランティアなどの協力を得て難局を乗り切った金山町。住民が主体となった地域のネットワークづくりが一步步進んでいます。



1 サロン活動の様子。社協職員と地域包括支援センターの職員が運営に当たっています。
2 近隣に住む高齢者の見守りで除雪を行っています。3 ひとり暮らし高齢者親睦旅行のワンシーン。この旅行がきっかけで、ふだんから連絡を取り合う仲間も増えました。

かねやま

金山町 社会福祉協議会

職員総数:18名
(常勤6名・臨時職員1名・
登録ヘルパー11名)

〒968-0006

大沼郡金山町大字中川字沖根原
1324番地

老人福祉センター「ゆうゆう館」内

TEL (0241) 55-3336

FAX (0241) 55-3412

金山町

エリア情報

(平成24年5月30日現在)

人口: 2,470人

世帯数: 1,119世帯

高齢化率(※): 54.4%

※65歳以上の高齢者人口が
全人口に占める割合



「地域のニーズを把握するために、地域福祉座談会を平成元年から実施しています」と事務局長の加藤ゆきさん。

「昨年の水害による家屋の片付けや泥だしなどの作業は終了し、元の生活に戻りつつありますが、いまだに不安を抱えながら生活している方もいます。その不安を解消するために、民生委員が訪問して状況を確認するとともに、地域包括支援センターや保健師などと連携しながら丁寧にケアしていきたい」と話してくれたのは、事務局長の加藤ゆきさん。老人福祉センター「ゆうゆう館」内にある金山町社協では、「小地域生活支援ネットワーク形成事業の推進」を重点事業の一つとして掲げています。この事業は、住み慣れた地域に暮らし続けるためには、どのような支援が必要かを住民が主体となって話し合ってもらい、社協が運営支援・アドバイザリーになるというもので、平成14年

その地区に合わせた 福祉の支援を考える

からスタートしています。

「現在6つの地区をモデル地区に指定していますが、どの地区でも冬期間の除雪支援が課題として挙がっています。金山町は地域によって6世帯から120世帯とバラツキがあるため、その地区に合った支援が必要となります。的確なニーズをつかむためにも私たち自身がまず地域に出て、お話をうかがいながら社協本来の地域福祉活動を進めていきたいですね」と加藤事務局長は、草の根的な支援の大切さを教えてくれました。

笑顔でつながる 金山町らしい福祉

町の福祉ニーズの掘り起こしについて、福祉活動専門員の五十島寿子さんにお話を聞きました。「月1回のサロン活動の他にも、町からの委託を受けて、いきいき生活クラブを町内6箇所で立ち上げています。血圧測定や体操、ゲームなどを行い、お茶のみがてら近所の困っていることを聞いたりしています。送迎バスを使っている地域交流はとても好評ですよ」。他にも、金山町社協では年に1回、65歳以上のひとり暮らしの

* 金山町社協の心得 *

- か・感謝の心を持って活動に取り組む
- ね・ネットワークを広げよう
- や・約束を守ろう
- ま・真心と笑顔の対応
- ま・間違いを正し、間違いを責めない
- ち・地域福祉活動の推進を役職員一丸となって取り組む

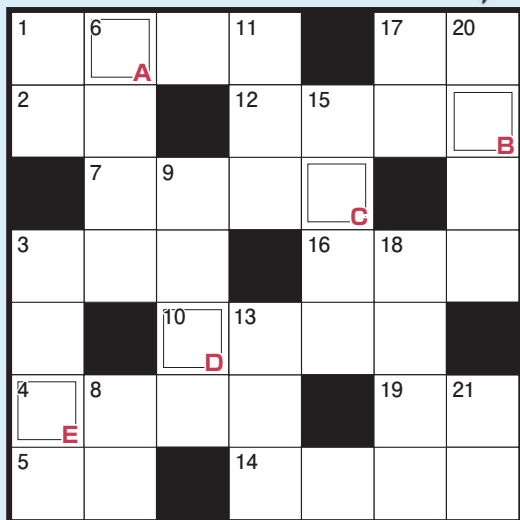
「親睦旅行の記念写真はこれまでお宅に郵送していたのですが、今回から一人ひとり直接手渡すようにしたいと考えています。まずは地域に向いて皆さんに顔を覚えてもらって、福祉ニーズを自然に吸い上げる流れを作りたいですね」と五十島さん。金山町の風土にも似たアットホームな福祉の絆が生まれています。



「社協職員同士、下の名前呼び合う間柄。気兼ねなく話せるのは嬉しいです」と、福祉活動専門員の五十島寿子さん。

チャレンジ! クロスワードパズル

全部できたら二重ワクの5文字をABC順に
読んでください。そのことが答えです。



応募方法

ハガキにパズルの答えと ①住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号、業種 ②本誌に対するご意見、ご感想、ご要望を全てご記入の上、下記までご応募ください。

締切

平成24年8月15日(木)

宛先

〒960-8141 福島市渡利字七社宮111
社会福祉法人 福島県社会福祉協議会
「はあとふる・ふくしまパズル係」

※ご記入の個人情報は適切に管理し、目的以外に使用しません。

↓タテのカギ

- ① 願いを書いた短冊を飾ります
- ③ 福島県は内堀雅雄氏、東京都は猪瀬直樹氏
- ⑥ うなぎ料理の定番
- ⑧ ○○顔、○○丁、○○綱、下手の○○好き
- ⑨ 上から読んでも下から読んでも同じ鳥
- ⑪ 雷様はこれを奪い取ってしまうとか
- ⑬ ラーメンに欠かせないトッピング。別名シナチク
- ⑮ コレの唐揚げは名古屋めしとして有名
- ⑰ 喜多方には、4,200 棟以上もあります
- ⑱ 用水路などに棲んでいます。漢字で書くと「喇蛄」
- ⑲ ツッパリスタイルで一世を風靡「横浜○○○○」
- ⑲ 70 年代後半に話題となった都市伝説「○○裂け女」

→ヨコのカギ

- ① わざわざ人の気分を害するような言動
- ② 味噌煮が定番の魚。○○を読む
- ③ 4、13、黒猫、カラス、合わせ鏡、鼻緒が切れる
- ④ お金を銀行に預けるのは「預金」、では郵便局は?
- ⑤ ○○暗示、○○完結、○○紹介、○○中心的
- ⑦ 浪江・横手・富士宮などで知られる B 級グルメ
- ⑩ 夜にコレをすると「ヨコ③」という迷信も
- ⑫ もとは退役軍人や老兵を表す言葉。⇄ルーキー
- ⑭ 日本の三大新聞と言えば、読売、朝日と何?
- ⑯ 国民的アニメの主人公。苗字はフグ田
- ⑰ 糠に○○
- ⑱ 絵や賞状を入れて飾ります



抽選で
当たります

今月の当選者の中から抽選で3名の方に、NPO法人さぽーとセンターびあ・自立研修所ビーズ(南相馬市)の「さりをポーチ」をプレゼントいたします。なお、当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。



5月号の正解

「支援チーム(シエンチーム)」

多数のご応募ありがとうございました。

ふくしまから
ありがとう

朝日見て
きつと
浪江町



宮代応急仮設住宅
自治会役員一同
(浪江町)

昨年 8 月からこの仮設住宅で生活をしています。これまで住民みんなが元気で過ごせたのは、多くの方からのたくさんの支援があったおかげです。

避難当時は、寒い中での移動の繰り返しで大変苦勞をしましたが、そんな時でも、炊き出しや物資、お風呂の提供など、知らない方々にいつも支援をしていただき、簡単な言葉では表せない人間のつながりを感じました。

最近、近くの高校の美術部の生徒が仮設住宅の壁に絵を書いてくれました。これまでとても冷たい印象だった仮設住宅の色が、ぬくもりのある華やかな印象にかわりました。「海から昇る太陽」、「浪江の花コスモス」を描いていただき、ありがとうございます。

これからも浪江町に帰るという「希望」と「目標」を持ち、夜明けを信じていきたいと思います。



東日本大震災を経てお世話になった方への「ありがとう」の気持ちを、ぜひお寄せください。投稿方法など詳細は県社協ホームページをご覧ください。

福祉の求人、求職は福祉人材センターへ

8 月の「福祉の仕事相談会」の日程

〈相談受付時間 午前10時～午後3時(全会場共通)〉

1日(水)	8日(水)	10日(金)	27日(月)
会津若松市 社会福祉協議会	いわき市 社会福祉センター	白河市 中央福祉センター	郡山市 総合福祉センター

県社協 人材研修課 福祉人材センター／メール jinzai@fukushimakenshakyo.or.jp

TEL (024) 521-5662 FAX (024) 521-5663

★ネット紹介システム(インターネット求人登録)は、

<http://www.fukushimakenshakyo.or.jp> の福祉人材センターホームページからアクセス!

ひとり親のみなさんの就業を応援します

母子家庭等就業・自立支援センター

8 月の「就職相談会」のお知らせ

〈相談受付時間 午前10時～午後3時(全会場共通)〉

8日(水)	20日(月)	22日(水)
会津若松市 会津保健福祉事務所	福島市 県総合社会福祉センター	いわき市 総合保健福祉センター

- 相談無料 事前に予約が必要です。
- 随時、お仕事の相談を受け付けております。上記以外にも県内各地で相談会を開催しておりますので、お気軽にご連絡ください。

県社協 人材研修課
母子家庭等就業・自立支援センター
TEL (024) 521-5699
FAX (024) 521-5663
メール boshi@fukushimakenshakyo.or.jp

編集 後記

二本松事務所で開催している県民介護講座の中にも「介護する家族の心のケア」というテーマの講座があります。とても人気があり、県民のみなさんの関心の高さがうかがえます。震災以降、様々なストレスを抱えながら生活している方々が多いなか、今回の特集で取り上げたふくしま県民の心を支える取り組みが広がっていくことで、少しずつふくしまの「こころの復興」も進んでいけばいいなと感じました。

わたなべ ゆう
人材研修課 渡邊 友

発行日／平成24年7月13日

制作・印刷／(株)日進堂印刷所